

書評

書評・島菌進・安丸良夫・磯前順一著

『民衆宗教論―宗教的主体化とは何か』

東京大学出版会、二〇一八年

玉置文弥

本書は、民衆思想史の大家安丸良夫の死後（二〇一六年）、安丸から薫陶を受け、直接議論を交わしてきた島菌進と磯前順一らによって編まれた、民衆宗教を主題とした論考集である。

三者の論文・講演などが収められている本書は、四〇〇頁近くもあり、またテーマも「宗教的主体化」という一筋縄ではいかぬものである。多くの紙幅が必要であることは容易に想像されよう。しかし詳しい内容紹介の書評は別のところでされており（弓山達也、二〇二二）、また全てを論じるのは評者の手に余る。したがって、本稿では評者が重要と考える点を中心に本書の意義と疑問点を示しておきたい。

まず本書の特徴として、磯前が二〇一〇年代という「現在」の地点から、安丸・島菌は一九

七〇年代―一九八〇年代という「過去」の地点から（島菌については自らの過去の論考を振り返る総括的文章も収録）、それぞれ論文（もしくは講演）を発表している点が挙げられるだろう。

評者にはそのことが、さながらそれぞれが時空の交差点で対話しているかのように映った。それは何をもたらすかと言えば、「民衆」という言葉が、島菌が指摘するように「社会構成が複雑化した現代社会では何を指すのかがわかりにくく、使いにくい」（i頁）現在と、いまだ「社会革命の主体を前衛たるエリートではなく、民衆に求めるマルクス主義のニュアンス」（三三頁）が有効であった過去の間で、「変革主体が民衆である」（三三頁）という可能性や期待が込められて立ち上がり、やがてポストモダン、オウム事件

を経て停滞していったとされる民衆宗教研究を、ある意味で超時代的に、それでいて歴史的に様々な視角から浮き彫りにし、そこから掬い出されたエッセンスによつてふたたび、常に動的なその研究の「場」を作り出すということではなかつたらうか。

いささか抽象的な物言いかもしれないが、評者はそこで見出されたものこそ、本書のテーマである「宗教的主体」だったと考える。

さて、ここで言われる主体とは、「何かから自己を切り離して、完結した」(一一頁)、啓蒙的・近代的なものなどではむろんなく、それが構築されるときに切り捨てられた残余として、主体の自己統一性に不安をもたらす「小文字の他者」(ラカン)にまなざされた存在である。ではその他者とは何か。磯前(第一部)は「謎めいた他者」とそれを呼ぶ。その時、「超越」が問題になる。すなわち、「現世」、「既存の価値観」、「自分自身」を越え出る時、「主体にどのような事態が出来るのか。主体は何を受肉し、どのように再編されていくものなのか。そもそも超越する主体とは誰なのか、何なのか。人間なのか、神なのか。」

(一九頁)という問いである。「超越」とはここで、「自己を取り巻く状況全体を俯瞰する力」(二六頁)とされるが、それを如何にして得るのかが重要だという。その答えを磯前は、おもに安丸と島菌の間で交わされた議論(詳しくは第二部・第三部を参照)を軸に、超越論、回心論、転移論、呪術論、生神論、世直し論、異端論、救済論という視角から探っていく。その探究の過程は本書を読んでもらいたい、たどり着いたのは、案外素朴な場所だった。

「凡夫にて相分かりません」(金光大神)や「正しさという我を折る」(出口なお)のようにして「自分の無力さ」に気づくことで、「謎めいた他者の声」を聴くこと。それによってはじめて、主体が「大文字化されない小文字の神との関係において再編成されていく」(一四一頁)。反対に「超越性を失ったとき、人間は主体性を失い、誰かの一部に同化されてしまう。もはや謎めいた他者の声は聞こえなくなり、国民や教団、あるいは学会の一部に呑み込まれてしまう」(一五六頁)。それこそ「市井の隠者」であろうとした安丸が一生をかけて抵抗したものであった。し

たがって、磯前は言う。

知識人が民衆の側にいるという言葉が正当性を帯びるのは、自分の思想化という営みが、知識人の抽象化行為と緊張をはらむ生活世界に下降していく冒険が試みられるかぎりにおいてである。しかも、それが表現行為である以上は、そこで出会った謎めいた他者の言葉をもとに、再び抽象化に上昇する義務がある。その上昇運動を放棄し、生活の中に埋没するとき、もはや表現行為は特殊を普遍に繋げる回路を見失う。民衆であること、そして民衆との出会いはかくまひに「困難と苦渋」を伴うことを、安丸の学問が描いた軌跡は私たちに教えてくれている（一五七頁）。

超越に関する議論もそうであったが、当たり前と言えば当たり前の言ではある。しかし、安丸の仕事を通して民衆宗教研究の現状を振り返るとき、それとは反対の状況があることに、内在的に、痛みと共に気づかねばならない。そこが、我々の立つ

ている「現在」の場所だろう。

安丸が金光教団で行った講演・質疑応答（第Ⅱ部）では、民衆宗教という視角からみた日本史が論じられているが、その中でも歴史を研究する意味を次のように語っている。

人間の生き方というものは、みなあるわけで、民衆は民衆なりに生き方があった。その生き方についての自覚ということのかなり重要な面を、私の場合には、歴史というような言葉で表現している。……だから皆に、歴史家になれ、というようなことをおしつけるつもりはないが、人間らしく生きていこうという一番根源的な願望がもっている意識を考えていくと、私のような筋道も考えられるということを提起しているつもりである（一九五—一九六頁）。

言い換えれば、人間として、人間らしく生きていくためには「民衆の生き方」としての「歴史」を探究していくほかない、ということなのであろう。これは超越Ⅱ全体性の獲得を目指す安丸思想の核

心のように思われる。

さて、最後に本書に対して問題提起をしておきたい。すなわち帝国日本の天皇イデオロギーと民衆宗教の問題である。それは主に第I部で出てくるとは言え、本格的に考察されない。一つだけ例を挙げれば、一九二〇年代から大本教の出口王仁三郎が「北東アジアへと進出するようになり、日本主義と帝国の普遍主義に「彼の」言説が複雑に絡み合っていく」（二二〇頁）とあるが、それは天皇・国体論ともかかわる民衆宗教の重要なポイントである。しかし民衆宗教が、帝国のイデオロギーをどうとらえ返し、国内外で言説化・行動化していったのかについては等閑視し、正統としての国家が異端としての民衆宗教をかねてしまった、という視点からのみしか論じていないのでは、結局王仁三郎は「天皇制的な国家秩序に取り込まれるのを積極的に推進した」（二一九頁）となつてしまい、さらに昭和戦前期におけるあの「草の根ファシズム」的熱狂も、単なる「複数性を失つて均質化された」社会（一二四頁）としか映らないだろう。それはむしろそんなのだが、その「主

体」（例えばこの場合は王仁三郎）を内在的に解釈する作業は必須である。こういった視座は、民衆宗教研究の新たな局面を切り開くものではないだろうか。

あとがきにある晩年の安丸の言葉——「自分ももう少し若ければ、今度は中国大陸に進出した出口王仁三郎のことを書きたい」（三八五頁）——を見て、この課題は、評者が引き継ぐ、否引き継がねばならないと、改めて決意した。本書の存在は、評者にあつて、そういうものであつたのかもしれない。それを経なければ天皇イデオロギーや日本の東アジア侵攻と、民衆宗教の関係性の核心を突くことはできない。

【参考文献】

- 弓山達也、二〇二一、『宗教研究』（四〇〇号第九巻第一輯）「書評・島蘭進・安丸良夫・磯前順一著『民衆宗教論—宗教的主体化とは何か』」日本文学学会。